



第 4 5 号
平成 十 三 年
(2 0 0 1)
1 0 月 1 5 日 発行
(年 4 回 発 行)

雁の便り (文氏へ)

東 明雅

酷暑の夏も漸く終り、新涼の秋を迎えました。お変わりなく益々お元気何よりに存じます。お手紙拝受、この夏、わざわざ山梨県に木喰記念館を訪ねられた由、そのお話おもしろく拝誦しました。私は木喰のいわば先輩にあたる円空には、いささか興味を覚え、調べたこともありましたが、木喰については全くの素人です。しかし、同封された木喰仏の写真を見ても、円空仏がみな彫が厳しく、人を容易に許さぬ高さを感じるのに対して、この木喰仏は「微笑仏」と言われるように、丸い顔、豊かな頬に満面の笑みをたたえ、人をやさしく受け入れています。私は木喰上人とその微笑仏の価値を初めて知りました。しかし、私がびっくりしたのは、お手紙の

次の章を読んだ時でした。

「翻って、これからの連句も又、いたずらに高踏的で人を驚かす文芸至上主義にとらわれるのではなく、どなたにもやさしい、滋味のある詩境を目指したい、明雅先生が根気強くおっしゃって下さっているのは、この道だつたのだと、しみじみ思ったことでした」

そう言われれば、平成になってから、私は連句は世態人情諷交詩であると定義して、連衆の和を大切に、連衆心の復活を説き、手法としては、付けと転じを重視して、無心所着を否定してきました。

この私の連句観、また連句に対する態度は古い私のお弟子さんの中にもあまり理解されず、ある人は、猫藪は昔(昭和のころ)は死物狂でよい作品を作ろうと努力したが、今はたとえれば初心者に対する指導も、手を取り足を取り懇切・丁寧に教えるばかりか、捌きも一直・二直して作品を作り上げると非難しました。しかし、これは古い文芸至上主義から新しい連衆の和を重視する方向に転じたものとしては当然のやり方で、私はこれが正しいと思っております。

また、今年三月村野夏生氏が「歌仙行」と言う本を出版された時、ある人から、世態人情諷交詩を主張するあなたが脱線付(無心所着の一種)を唱える村野さんの「歌仙行」の序文を書き、推薦するとは何事かと、きつい叱りを受けました。私が無心所着を否定する

のは、この方法を使えば自分の作品が連句ではなく連詩になるからで、その点を除けば、「脱線付」の方法は連詩として見るとおもしろく、魅力あるものだったのです。

尤も、この無心所着の問題は猫藪通信30号、同31号にも論じましたが、結局は、付味のよい空擽の付は容認、はっきりした無心所着は避けたいというところでしょうか。

このように、私は連句を、人と句数を争い自分の才学を誇るものではなく、あくまで人と和し、人を助けまた人に助けられて一巻を首尾する、そこに「連歌しの友は、従兄ほど親しきぞと申しはべり」と宗祇が言っている通りの連衆心が湧くものだと考えておりますが、この考えは右のように、私のお弟子さんの若い方はもちろん、長年私と親しくして来た人の間にも、十分理解されていないのではないかと考えておりました。

その折に、今度のあなたのお手紙を拝見して、たとえ、お一人でも、私の連句観、また連句に対する態度に興味をもたれ、わざわざ手紙を下さる人があるかと思えば、この十年間の連句活動も決して無駄ではなかったのだと知らされたような気がして、本当にうれしく存じました。

ただ、私はもう米寿に近い老齢、あなたは知命そこそこでしょうか。まだ今後迷われる事が多いでしょう。その際は迷うだけ迷って、ご自分独自の連句観を確立して下さい。

猫義同人会

平成十三年六月二十日
於 清澄庭園大正記念館

歌仙「墨絵の龍」 稲垣 渥子 捌

梅雨晴れや墨絵の龍の一喝す

渥子

見え隠れする夏蝶の影

久美子

中途なるクロスワードを埋め終へて

好敏

硝子ポットで淹れるハーブ茶

道子

島つなぐ橋点り初め宵の月

郁子

少年相撲に勝つ児負ける児

敏

秋燕を揚げばつる旅心

久

思はぬ人に肩を叩かれ

郁

おもかげはかすかに残る餓鬼大将

道

お隣さんはばつ二ばつ三

久

小泉の人氣に乗りて都議走る

道

稲荷神社で大吉の籤

郁

月に買ふ鯛焼館のたつぷりと

道

刺繍モチーフ雪の結晶

敏

誰が弾くギターはアルハンブラの曲

郁

角の酒場に指定席あり

久

あちらへも流れ行きしか花筏

道

深き窪みに数珠子眠れる

久

髪染めて春のスキーに申込む

敏

持て囃されるカリスマの店

同

未公認のまま出現の代理母

久

ITの勘少し狂ひて

道

金魚掬ひ掬へぬままに網破れ

郁

今年の浴衣黒が流行

郁

吾が君を好み通りに仕立て上げ

まるごと愛し法悦の闇

山の湯に猿の兄弟目をつぶり

かすかに聞こゆ江差追分

真夜の月ジャンボジェット機着陸す

晩稲ゆさぶるいち陣の風

職退いて写経ひたすら逝く秋に

ボランテアにも小さき喜び

高架線敷設竣工あと十年

ものつくり大学その後順調

お手植ゑの記念樹花の今盛り

雛人形をしまふ蔵奥

連衆 副島久美子 豊田好敏 加藤道子

東郁子

歌仙「鋭角に」 大島 洋子 捌

鋭角に空貫くや夏つばめ

池にさざ波ながし吹く頃

ペンを置く序章の音の深まりて

フルーツソース添へるアントレ

月光に煙突並ぶ陶の町

夜学子送る停留所まで

怒鳴られて仲間入りした秋刀魚漁

守り袋にイニシャルをつけ

姐さんの今度のひとは頬に傷

甘ききぬぎぬ煙草くゆらせ

洋子

朱鷺子

和弥

孝子

治子

蓉子

孝

抱き別れ技あり一本柔道着

雪被て眠る戦歿者墓地

関の声月に凍てたり兵馬俑

易者は長き鬚を蓄へ

何故売れる「チーズはどこへ消えたのか」

未だ健在ネズミ講あり

A3の出口這ひ出て花の雨

見返り阿弥陀拝みて春

京舞の帯ゆるやかに弥生尽

ドクトルマンボウ鬱の癒えしと

快走艇軸先に美酒の瓶を割り

入道雲の異名数々

清盛の落胤説を肯ふか

焙りて甲と打ちし大鼓

ナナハンに女攫つて暴走す

電撃結婚出会ひサイトで

魍魎魍魎跋扈跳梁時を越え

運を掴みし変人の月

新涼の嬰兒の口乳溢れ

芭蕉林より鳥唄の声

墨糸をびしりと打ちて老の意地

寒の夕暮れ車椅子押す

路地奥にシンボルマークの時計台

吾も映りし帽子屋の窓

花咲いて園遊会は艶やかに

みどり色濃き盆の草餅

連衆 橋朱鷺子 権頭和弥 坂本孝子

加藤治子 五味蓉子

弥

洋

治

朱

朱

孝

蓉

治

蓉

同

弥

治

孝

蓉

孝

蓉

弥

孝

治

蓉

同

孝

弥

治

孝

朱

洋

治

弥

洋

治

朱

孝

蓉

治

弥

歌仙「遠く去る人」

おおた けんのすけ 捌

万緑や遠く去りたる人の影* けんのすけ

初蠅の鳴くを聞きたり 佐紀子

絵画展準備すつかり整へて 淑子

廊下を急ぐゴム底の靴 一恵

ワンサボンタイム吾児読みをり三日の月 千町

何かをさがし太い竹伐る 美恵

秋蚕飼ふ家は一軒峽の村 淑

深き睫にねむる少年 町

いつの間にタツブ習つて流行りっ子 一

知らんぷりしてメールべたべた 恵

接吻し同床同夢かならずと 淑

お目ざの酒はうれし二人で 紀

残る月鷹の渡りの相次ぎぬ 淑

どこか狸に似たる坊様 一

あれこれとマンガで学ぶ核家族 淑

カウンターターにかけるプラボー 恵

赤青黄舞台に降れる花吹雪 紀

董たんぼぼ野辺にいつぱい 町

春の蚤床屋の椅子でいい気分 恵

仔象なれば長い鼻でチュ 一

お互いの聖戦続き銃重く 紀

書き換へられた歴史教科書 恵

裁判の傍聴席で拭ふ汗 紀

後宮三千牡丹三千 町

潤一郎いつくしみたるこの踵 同

殉教の刻恍惚として 恵

公文式算術算盤九九代数

調子はづめり鉛切りの音 淑

パントマイム翳爽やかな月舞台 恵

社長は南瓜会長は辛 町

紙相撲身体こごめて相撲取り 一

視野いつぱいに海みえる窓 淑

ダンディーの美髯剃られて長き病 町

屏風仕立ての歌仙曼茶羅 同

清澄の名石に降る花惜しむ け

ひねもす軋む園のふらここ 淑

*悼 和子先生 淑

連衆 間佐紀子 金久保淑子 山寄一恵

原田千町 山口美恵

歌仙「夏鶯」 倉本 路子 捌

この庭に夏鶯の声聞かず 路子

水輪かすかに細き五月雨 紀子

オペレッタスペシャル席を手に入れて 達子

ロングドレスにかけるアイロン あかり

十五夜を仰ぐ童の目の円ら 富美

風の間さまに揺るる芒野 守男

おくんちの果てて家中ぼんやりと 達

山の天狗と逃げた嫂 紀

紅の鼻緒の色も鮮やかに 同

思ひ出せない暗証番号 守

新車駆る並木通りの渋滞に り

すつと寄りくるジプシーの群

町長の尻ぬぐひする羽目となり 達

ただしんしんと凍月の屋根 紀

露天風呂猿や狸に見られつつ 達

短編小説仕上げ大の字 美

花盛り男の夢をたんと埋め 紀

秘伝の灸を据ゑてうららか 美

カラフルな春のパラソル選ぶらん り

ブラインドタツチャつとこの頃 守

これはさて仕合せ太りといふものか 達

一家四人に車四台 守

表刈の畑でそつとつかまえて 紀

アイスクリンの舐つこをする 紀

人魚にも涙壺などよく似合ひ 守

温暖化にて沈む国々 守

イチローの技と力の限り無く 路

貰ふファックス文字の躍れる 紀

逝くによき齢はあらじお命講 達

兵たりし日に眺めたる月 守

古酒そそぐ枡の片隅塩を置き 美

スーダラ節が十八番とか 美

何もかも流線型の未来都市 路

吉と出る卦は亀の背中に 紀

畏れつつ千年の花見上げをり 美

明日は越えなむ風光る峰 美

連衆 椿紀子 篠原達子 中田あかり

村田富美 近藤守男

歌仙「大江戸」 峯田 政志 捌

大江戸の名残り幽し梅雨の苑 政志
 そつと触れるる紫陽花の穂 庸子
 句集出す人にこやかに会釈して 志げ子
 好みそれぞれコーヒーの味 利子
 月渡る駅舎はビルに建て替はり 碧
 蜂の仔なんぞ探す村の衆 澄子
 去来の忌会者定離とは思へども げ
 矢絣模様流行るこの頃 庸
 突然の昔の彼のEメール 利
 エステに通ひヒップアップを 碧
 値下がりの不動産価値どうしよう げ
 犬に牽かるままの飼ひ主 利
 門々に柵挿せる北の宿 澄
 ロシアが見えし浜に月凍つ 庸
 ハチャトリアン姉妹でとちる同じ音 碧
 自棄酒酌めば八十路朗らか 澄
 無礼講青き筵の花の宴 利
 凧合戦の続く野っ原 碧
 巣籠りの親鳥何故か寝れぬし 庸
 苦節重ねて上梓せる辞書 利
 ロケットにアトムファンの夢つづく げ
 無重力でもこねるはつたい 澄
 海開き神主が振る弊千切れ げ
 外務大臣にらむ官僚 碧
 功成りて金のある身に足らぬ髪 庸
 自家用飛行機乗ろう一緒に 碧
 許されぬ恋の暴発魔の宮殿 志

吾は遠く山河鎮もる 利
 月の友ひとりふたりと集ひきて 澄
 秋濁きです抹茶お代り げ
 相撲部屋泣いていつしか横綱に 庸
 やさしき祖母にほほも打たれし 碧
 不燃ゴミ鴉がいつも見張つてる 澄
 タンDEM踏んで早朝の道 利
 今生の見納めと追ふ花前線 志
 大漁旗を立てて鯛網 げ
 連衆 久保田庸子 蒲原志げ子 梅田利子
 松本碧 八角澄子

歌仙「浮巢かな」 吉村 ゑみこ 捌

文左衛門ゆかりの庭の浮巢かな ゑみこ
 池の一隅河骨の黄 壽子
 大切りに紙吹雪舞ひ声飛びて 千恵子
 はさみ操り猫の横顔 秀樹
 名月を待つ間ちびちび酒の酔 美津
 霧の流れは森のミルクか 壽
 ひよんの実をみつけ胸張る男の子 津
 休み時間と放課後が好き 樹
 メル友が会ひたいなどと言ひだして 同
 小町を誘ふ自称業平 千
 願掛けに曼茶羅寺へとこつそりと 壽
 コンビニで買ふ三枚のotto 千
 アンデスの高嶺遙かに返つる月 同

吾に崩れ来冬の銀河の 津
 履き慣れた靴は手縫ひの最高級 壽
 からくり時計歌ふ市役所 千
 開通の道路の若木花をつけ 樹
 稲荷のお出賑々で行く 津
 うららかに包丁研ぎの敷く筵 樹
 元氣の秘訣ナットキナーゼ 千
 猫網と言はれてもよし死ぬるまで* 樹
 なすべきことの指揮棒を振る 津
 低音を響かすベースジャムセッション 壽
 採点ミスに生まれたる恋 樹
 「おいあれ」ですべて通じる夫婦仲 千
 冷やしうどんの味噌は特製 同
 凝り性が山の噴水汲むボトル 同
 ばか丁寧な異人瘦せぎす 壽
 月が見る不老長寿の有処 津
 嵯峨野の奥の秋の七草 津
 初瀬の銃の点検じつくりと 樹
 押し出ない居留守常習 壽
 シーサーの良の方ならみ居り 千
 海へ水彩流すデューファイー絵 壽
 花万朵千年の刻思ふ樹医 津
 大の字となる陽炎の原 同
 *猫網||強情で人の意見に従わぬこと 同

連衆 杉山壽子 鈴木千恵子 青木秀樹
 桑原美津

猫養会例会

平成十三年七月十八日
於 江東区芭蕉記念館

歌仙「黒揚羽」 上月 淳子 捌

黒揚羽たちまち森にまぎれけり

カメラを提げる白服の肩

会見の同時通訳汗拭きて

地球はひとつ流る歌声

お団子を月にあげよと賑はふ子

運動会の準備万端

雁渡る信濃の山の重なりし

受賞の報に飛び上がる妻

生くる時死にたる後もと愛誓ふ

保険を掛ける黄金の腕

発掘の秘宝山程持ち去つて

散歩をねだる犬の甘噛み

リストラの痛みを照らす冬の月

塩鮭の頬げつそりと瘦け

禅寺の修行抜け出す傾きもん

三味線弾いて渡る甲斐性

京の町上がる下がると花の舞ふ

絵風土産に乗る新幹線

春裕個展に集ふ女ども

ワインかたむけ誉めて貶して

ライン河古城それぞれ歴史秘め

広場に見上ぐ聖人の像

脚気病むころもありしと父の皺

涼風吹きて男女同権

合鍵をそつと差し入れ廻す音

恋の熟成長きまどろみ

「飛鳥」にて世界一周古希の夢

新しきこと日々に体験

兄弟子の明け荷を担ぐ宵の月

くにの差し入れ新酒四斗樽

秋の夜の遺言までも語り出し

書棚の奥の日記帳焼く

かすかなる潮騒遠く響き来て

リズムカルなるトッカータ聴く

ひとり見るには惜しき繚乱の花

雛の面を包む薄様

連衆 登坂かりん 日高玲 荒川有史

若松香

歌仙「炎昼や」 近藤 守男 捌

炎昼や橋の往来隠れなき

どぜう鍋屋の暖簾白抜

国賓の視察行程カーナビに

軽くうそつく同時通訳

満月に珊瑚産卵見しと聞く

古びし甕に醸す葡萄酒

宿乞へば爽籟応ふ尼僧院

ペアーリックで山のガレ場に

あれがまあ理想の女なの只の女

純ちゃん純ちゃん壁に貼ります

コーヒーの香りたゆたふ午さがり

ドライフルーツ混ぜるパン生地

寒行の団扇太鼓の風に乗り

狐狸のかつぐ三日月

分校に福耳を持つ校医さん

ロックCD繰り返し聴く

直木賞人の世の華花の下

蜜吸ひ了へて唸り翔つ虻

早慶のポートレースに声からし

ほろ酔ひ機嫌割引の寄席

鏡文字達人の域と囃されて

中折帽子ちよつと深目に

青時雨モンマルトルの地下酒場

デートリツヒの脚撫でる夢

塗り薬届かぬところ塗り塗られ

ぶいと出てゆく糟糠の妻

床柱みがき丸太の杉柁目

のっぺらぼうに鬼火ゆらゆら

深泥池月浴びて佇つ陰陽師

残菊を刈る老の重き手

角伐の仕掛マニュアルパソコンに

障害物に挑むロボット

こいつめが勝手に動くと掏摸の弁

がまの油の刀巧みに

弘前の城址に揺るる花簪

萌黄の羽をまどふ鶯

連衆 蒲原志げ子 島村暁巳 佐古英子
橋野代々子 山本要子

歌仙「下町に」 篠原 達子 捌

下町に残るすだれ屋川涼し
 膝をくづして囲む茄子漬
 CDの透きたる音色楽しみて
 サッカーボール堀に蹴る子等
 満月のかかる公園森閑と
 ぎんなん匂ふ折々の風
 槍鶏頭信濃追分ふたり旅
 湯にはひるたび仲の良うなる
 女房のことが心の隅にあり
 ケータイ電話不意に鳴りだす
 我が党が輿論調査の上位占め
 いっこく堂は世界進出
 熊使ひ鞭ふりあげる寒の月
 鎌鼬とは魔女の仕業か
 野仏は山ふところに御座します
 姉の見舞に玉子さげゆく
 枝垂れたる花に触るれば染まる指
 利茶の席に碧眼の客
 高階の窓うららかに飛行船
 夢屑盗む猿がうとうと
 わけもなく嘘つく癖が直らない
 心経謹写ひまな校長
 斑猫の跳び交ふ道に迷ひこみ
 ナイヤガラの瀧絶えず虹立つ
 ロケ隊のちよつと気になるあの男
 恋の行方を占ひにきき
 酔ふほどにいや増す想ひ狂ほしく

負けた箆碁をまた置いてみる
 やや寒の月のぼり初む森の上
 木天蓼囓り踊る三毛猫
 秋祭余興の芝居うけにうけ
 菊枕して爺のやすらか
 回覧板お国訛で書かれをり
 珈琲一杯消えたお利息
 花筵宝ちらしの花衣
 みどり児歩む囀りの中
 連衆 中田あかり 日高英二 秋山志世子
 長崎和代 間佐紀子

既視感アシタヒユの生るるアイス・ハーケン
 神父様カウンターテナーが自慢にて
 草もふるへる城の前庭
 縄手から大手に抜ける花並木
 胡蝶を指してジョッキの鞭
 春日傘黒は何やら魔女めいて
 断頭台より蠟燭けの首
 あたりよき象牙耳かき愛用し
 定齋売りの回り来る頃
 浮袋座敷たちまち海となり
 キングサイズに親子三人
 寝言でも呼んではいけない名のありて
 共犯の壺割ってみようか
 引つ越しは何でもかでも均等に
 お仏壇から渋面の祖父
 兵隊の位で言へば将の月
 兜の下できりぎりす鳴く
 やや寒の故郷に知れる人のなし
 兄の馴染みと寄りし居酒屋
 堅琴とチェロの奏でる曲を聴き
 蔵書票には凝った木版
 手鞠つく花翻々とかぶる髪
 八十八夜のお茶の届きぬ

歌仙「卓淋し」 橋 朱鷺子 捌

卓淋し定座は留守の蘭座布団

朱鷺子

一輪差しに赤き射干

弘子

高速路オーブンカーを駆るならん

常義

サンドイッチと水詰める籠

碧

週末の野外演奏月浴びて

有子

迷彩服の揃ふ肌寒

路子

白き家林檎畑に囲まるる

義

婚前旅行訪ひしレマン湖

路

あの人魅力はなあにキス上手

有

お多福豆が僕は好きです

義

神在す信濃の国は山高く

碧

鼻の目の細る寒月

弘

風を聞く夜は熱燗をぐい呑みに

路

ごろ寝の枕広辞苑なり

有

アールデコ・アールヌーボーで飾るビル

碧

ベビーバギーに嬰のみる夢

路

遊園地歓声包む花の雲

碧

鼻欠け地蔵に供ふ草餅

路

ゴム風船点となるまで見やりたる

弘

リストラ隠し家を出る朝

有

迷ひ猫ひと月飼へば己がもの

碧

貼り跡ばかり残る電柱

義

パンの会表紙は裸婦の第号

路

刺青男似合ふシャツ

碧

老いらくの恋は腕執り腰支へ

有

倍気を有め賺かす奥の術

路

ダイアリー恨み言のみ書かれをり

義

崇徳上皇睨む千年

しず心磯馴れの松の月仰ぐ

大阪弁のラップ聴く秋

さんま出てこれは韓国産といふ

某省某局某係長

やうやくに足の捻挫の直りかけ

メジャーのバットに送る喝采

果知らず真正の花求めゆく

硯の海に立ちし陽炎

連衆 市野沢弘子 生田目常義 松本碧

佐々木有子 倉本路子

師の書簡封せしままに雷走る

一輪さしに玫瑰のとげ

発明展夏休みなる子を連れて

押すと引くとを間違へるドア

月に吠ゆ犬の声よりうまくなり

秋深まればみんな詩人に

収穫祭田の神様は紅の類

テレビ企画のお見合ひにのる

眼帯をして出てきたるガッチョマン

PTSD合はず帳尻

通訳の仕事もやと板につき

首までどっぷりつかる柚子風呂

一茶忌の黒姫山に月淡く

師の書簡封せしままに雷走る

一輪さしに玫瑰のとげ

発明展夏休みなる子を連れて

押すと引くとを間違へるドア

月に吠ゆ犬の声よりうまくなり

まあるく掃いて四角四面に

自分史をやつと書きあげ上梓せん

夢ふくらますオーボエの音

花吹雪土蔵の屋根を包むほど

園児こもごも蝶の後追ふ

フランス語パピプとはじけ春麗ら

外国産馬またも優勝

どら息子親のへそくり探しだし

機種機能に追いつけぬ吾

宇宙発地球環境危惧説も

目当ての女待ち伏せる飯匙債

手なづけて抓つてみたり香も嗅いで

どたどたどたと漢出て行く

知床をローカル線でたどる旅

ラーメン横丁此処も満席

終の灯の百物語月出づる

鬼の捨て子が外務省裏

そぞろ寒誰もがブラックスーツ着て

入札ハンマー一億で鳴り

酒倉は古き壑道吟醸酒

高校駅伝逃水の中

襲名の舟乗り込みに花万葉

春告鳥の伴奏を聞く

連衆 梅田利子 梅田実 小池啓子

杉山壽子 五味蓉子

歌仙・擬「牧羊神」 原田 千町 捌

夏蝶や牧羊神の夢醒ます

草合歌を吹くかろやかな風

離着陸空港に子と旗振りて

電池入れ替へ動くロボット

手文庫にカタコトと鳴る宝物

秋の拾の揃ふ集り

喧騒の奥より現るるねぶたの灯

おいと呼び捨て新走り酌む

あくがれし女の亭主どん臭く

裏階段で人を操る

のつべらぼうろくろつ首も棲むといふ

何処からとなく琵琶の嫺々

レモン色キャンデイみたいね冬の月

デジタルテレビボーナスで買ふ

妻夫相前後して直木賞

猫が薄目をあけて見てゐる

海棠は小雨の庭の主なり

春のスキーへ支度万全

干鰯を噛みしめ戦後戦中派

革命語る舌のなめらか

ある時は詐欺師時には強請屋に

UVカットの品はさまざま

蚊が刺すと思ひ切りよく頬張られ

秘書に持たせるお店一軒

閨妬み清姫の血がとぐる巻く

単線列車終着の駅

結氷の湖に待つ大白鳥

千町

やす子

秀樹

嫺

了齋

澄子

斎

嫺

町

嫺

や

樹

や

嫺

澄

同

樹

や

斎

嫺

樹

嫺

斎

や

澄

樹

や

サテイの曲が満たす優しさ

街角のパンツマイムを月照らす

酒断ちし父うそ寒げなる

卓袱台に転がし遊ぶ木の実独楽

落語の稽古ちよつとつかへ

私も鬼千匹も傘壽です

門を閉ざした禅宗の寺

停泊の客船に花いま盛り

一眼レフに覗く陽炎

* 歌仙擬II 花二月の歌仙、花は匂ひの

花一本、枝折の花は櫻以外の春花。月

は折りに一つ、いづれかは秋月。

連衆 池田やす子 青木秀樹 八代嫺

鈴木了齋 八角澄子

引き剥がす影なし石の炎天に

サングラス濃く曲る街角

けとばし屋青き簾を入るらん

墨磨りゆけば心落ち着く

月の出に蝸の声川の音

オリーブの実の熟れし中庭

万鬼祭面さまざまに工夫して

不肖の酔酒を注ぎかけ

男にも育児休暇といふがあり

アイドルのため作詞作曲

サテ

斎

町

斎

澄

樹

町

斎

ボンボンの流行りマフラーパールック

出逢ひ信じて雪山の月

仲良しと秘湯めぐりの口喧嘩

イヤホンの紐ぶつとりと切れ

銀座裏画廊づとめの十五年

千秋楽に「春の夜の夢」

立ちつくすひと包みたる花の渦

方向音痴の子猫ふらりと

初虹の片脚かかる単線路

少年探偵二挺拳銃

エツシャアの騙し絵に棲む鳥捜し

トラジャコーヒー幻の味

抱かれてまだ抱かれぬ夜を思ふ

あやふき恋のぼっぺんを吹く

今年こそ名を変へたいと急馬に書き

しやきしやきと研ぐ米の輝き

公認は受けず独りの立候補

雀の並ぶ大屋根の上

昼の月御意見無用のダンブ行く

露の頃には蓴麻疹出る

洛北にうるかの好きな友ひとり

どれもがらくた香具師の道具屋

母慕ふロボットの旅物語

電子の辞書を使ひ潰しぬ

先輩の卸を貰ふ花の門

湖を渡って消えるてふてふ

連衆 下鉢清子 式田恭子 鈴木千恵子

高橋豊美 伊勢本如代

恭

悟

美

同

恭

悟

美

同

清

恭

千

清

美

千

美

千

清

恭

美

恭

美

悟

同

千

清

如

美

千

美

清

恭

清

恭

美

清

恭

耳をすまして

八代 嬭

甲斐の山里に嫁いで三十余年。ここでは未だ観光客が押し寄せることもなく、昔ながらの季節の行事が素朴に受け継がれている。

特に孟蘭盆会は大切にされる。八月に入ると、今年の新盆はどこそこの家だなどと話題になり、それぞれの家で墓の周りの草を取ったり掃除をしたりして盆路を整えておく。七日になると村中が墓参をする。賽の目に切きった茄子を洗った米と混ぜ合わせ、器がわり柿の葉に盛ったものを供え、「お盆さん、今年もいらして下さい」などと言って拝む。

十三日には朝から魂棚を作って、盆をむかえる。

かりそめに燈籠おくや草の中 蛇笏
魂棚の奥なつかしや親の顔 去来
魂棚の見えて淋しき昼寝かな 鬼城

今まで素通りしてきたこれらの句が、この頃はしみじみと心に沁みるようになって来た。季語の背後に広がる宇宙、その宇宙を膨らませるには、幾度かの季語体験の積み重ねが必要なのかも知れない。

盆を送った夜は、大きな納涼台を庭に出し、その上に寝ころんで満天の星を仰ぐ。ゆった

りと豊かな時である。

送り火やよもの山扉は空に満つ 誓子

どれほど文明が発達しようとも、人間の営みの根本は案外こんな所にあるのではないだろうか。

社では神事もまた盛んである。季節ごとの祭には、小さな村に単調なお囃子が一日中鳴り渡る。昨日まで畑で泥まみれになって働いていた人が、今日は金糸銀糸の衣装をまわって華やかにお神楽を舞う。村人はそれぞれ巻き鮓や煮物などを重箱にとっさり詰めて持ち寄り、食べたり飲んだりわいわいやつていく。

こんな光景を眺めていたら、ある本で白洲正子が京都の壬生狂言について書いている一節を思い出した。

「昔はふつうの座敷で、そこでお酒を飲んだり、お弁当を食べたり、居眠りをしながら見物したものだ。ときどき目を開けてみると、舞台ではまだ同じことをやっている：：お能でも歌舞伎でも、総じて芝居見物というものは、飲み食いしながら見る方が十倍も楽しめることは確かだ、そういう遊びの精神を失った時から芸も墮落したように思われる：：」

（「名人は危うきに遊ぶ」より）
言うまでもなく、甲斐は蛇笏の国である。

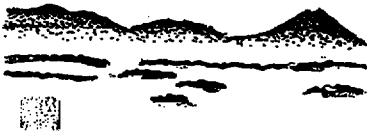
中央道で帰省する途次、蛇笏の境川村がある。そこを通るたびに思うー山中雲深く埋もれながら孜々として気迫のこもった句を創り続けたエネルギーの源は何だったのだろうか。

芋の露連山影を正しうす 蛇笏
寒を盈つ月金剛のみどりかな 〃
おく霜を照る日しづかに忘れけり 〃

今、作者と同じ「場」に佇つてみると、自然に対峙している作者の厳しい姿が浮かび上がってくる。季語を通して共感できるのだ。 困繞する山々の気をいただき、先人達がそうしたように、草木や虫魚の動きにじつと耳をすます時、私の心は満たされてゆく。そしてまた、

夏雲むるこの峡中にしぬるかな 蛇笏

この句に深く感応した暑い夏だった。



カット 若林文伸

季語と落語

島村 暁巳

「落語命！」の私はこのお題を頂いた時、まあ何とかなりそうだと気安く引き受けた。しかしいざワープロに向かつてみると意外に難物だった。筋を書いてしまえばたちまち原稿用紙は溢れるし、ご存知の方にはうるさいばかりだ。やむなく「あやしゅうこそもの狂ほしけれ」のままで硯に向うことにした：

六十年落語を聞いてきた中で、私が特に季節感を強く感じたのは次の二つである。

一つは三代目三木助の「芝浜」。隅田川に白魚が上がった話から『明けぼのやしら魚しろきこと一寸』に触れ、ぼてぶりの魚屋夫婦の会話にすぐ入っていくのは、いつ聞いても心地良く、明けてゆく芝の浜の空を賛嘆する魚屋の名科白で、すがすがしい冷気と清冽な江戸湾の海を彷彿とさせる名場面である。

もう一つは現十代目小三治の「二番煎じ」である。町内の番所で火の番をする旦那衆が禁断の酒と鴨、葱に、鍋まで持ち込んで酌み交わす光景には、知り合い同士の気安さに心身を満たす暖かい湯気、いい匂いが頬を緩ませるだけでなく喉まで鳴るのである。寄席がハネるやすぐに呑み屋に飛び込み、「熱燗！」と叫んだのは言うまでもない。落語の愉しみにはこの季節感が大きい。季語そのものを題材にしたものは意外に少ないが、題材には季語

が沢山ある。

まづは春。花見はメインテーマで「長屋の花見」には、『長屋中歯を食いしばる花見かな』というご存知の名句もあるし、「花見の仇討」「花見小僧」「花見酒」など多士済々で「崇徳院」「百年目」も花見がきっかけだ。「花見酒」は、あの生意気な談志に言わせればバブルを見事に言い当てている由で、残念ながら首肯せざるを得ない。他に春の季語を題材にしたものには、長閑、日永の「あくび指南」、田楽、田螺の「味噌蔵」、雪解川の「鯉沢」、出替りの「百川」、山遊びの「愛宕山」等々だが、ここで「あたま山」を外す訳には行かぬ。

これは「粗忽長屋」と並び立つ優れもので、その奇想天外さとリアリティの不思議なマッチングはまさに傑作中の傑作といって憚らぬ出来で、かつ見事なSFだ。「あたま山」はさくらんぼがことの始まりだから、夏でも良いかな？ 「鯉沢」「百川」は六代目円生、「味噌蔵」は三代目三木助、「花見の仇討」は十代目馬生、「愛宕山」は志ん朝が八代目文楽を超えたかも知れぬ。「粗忽長屋」は五代目志ん生、「あたま山」は八代目正蔵（彦六）だろう。

夏は「佃祭」「鰻の幫問」「夏の医者」等…：題材では冷酒、鯉の洗いの「青菜」、蚊と焼酎の「二十四孝」、四万六千日の「船徳」、川開きの「たがや」、卵の花の「千早振る」等めじろ押しだ。ここでは八代目文楽「鰻の幫問」「船徳」で懐かしい昔の酷暑をぜひ。

秋は「唐茄子屋政談」「鹿政談」の奉行ものに、「芋俵」「目黒のさんま」と季語では意外に少なく、題材でも烏瓜を火種に見せる「笠碁」「碁泥」と、ランク別の酒の名前が愉快な「三人旅」（一番安い酒が呑むそばから醒める『すぐさめ』、中どこが呑屋の軒を出たら醒める『のきさめ』、最高級が『村雨』で、これは村を出るまでは酔がもつからとは！）。お薦めは六代目円生の「唐茄子屋政談」と十代目馬生か現五代目小さんの「笠碁」。

冬、新年は「狸賽」「御慶」「倍気の独楽」「初天神」で、題材では玉子酒の「鯉沢」、火の番、熱燗、鍋物の「二番煎じ」、大晦日の「睨み返し」、雪見舟の「夢金」、一文字草（ヒトモジクサ）の「垂乳根」、初夢、宝船の「羽団扇」。お薦めはやはり冒頭で触れた現十代目小三治の「二番煎じ」と志ん朝の「夢金」、現五代目談志の「羽団扇」だと思う。

これで落語の四季も無事一年たったが、まさに九牛の一毛、氷山の一角に過ぎず誤認もありそうだ。同好の士のご叱正をぜひ頂きたい。落語は今時珍しいドキドキする愉悅で、もし出会わなかったらと思うとゾットするのは連句と同じだ。考えてみれば連句も落語も森羅万象とその中で人間の愉しみ、茶化し、そして讃仰する点で相通じている。これからも二刀流を大いに楽しみたいと思う。

与太郎のほめられてゐる秋麗 暁巳

季語の風景 I

佛淵 健悟

「女だけの都」という昔のフランス映画をビデオで見たら、「季節のうつろいに心が痛むの・・・」というセリフがあった。惹かれあう若い男女が塔に昇って、田園を眺めながら交わす会話である。恋のはじまりの胸キュンと季節の陰翳が親和する現象は、洋の東西を問わぬものらしい、という当たり前といえは当たり前のことに妙に感心した。

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つ
けふの風やとくらむ 紀貫之

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の
音にぞおどろかれぬる 藤原敏行

これらの歌もまた『季節のうつろいに心が痛む』例である。

立春、立秋は、寒さが緩み、暑さが緩和されるとば口だが、実際は『春は名のみ』で最も寒く、秋は残暑厳しい。この一番寒い日を春、暑い日を秋と呼ぶのは、ものの極まりの中に新しい季節の萌芽を読み取るうとする陰陽五行の思想によるもので、中国伝来である。

季節に対する感受性を言うのは日本文芸の好む切り口であるが、中国の制度である曆法に出会わなかったら、これほど分化された情緒をはぐくむことはなかったであろう。出会いはその命。この演歌的命題は、『一物衝撃』として俳句のDNAに保存されている。

それから、二十四節気、七十二候を眺めていると、季節にズレのあること、誰しも気付くのであるが、これらを消化吸収していく過程で、制度と実感のタイムラグをプラスの力に変えてしまったのがわれわれの伝統である。春立つ日の春を、秋立つ日の秋をたしかに認めるには、五感だけではないはたらきがいるようである。それは、ささがにの蜘蛛のおこないより恋人の出現を予感する、恋する人の心境のようでもある。

季語の見直しがいわれる。多くの場合、ザインとしての季語がゾルレンとしての季語に押されることの居心地わるさの表明である。

「春風にこかすなこの難の衆」。芭蕉の弟子、荻子のこの句を仲間で論じた時、この

「春風は」どんな風だろうとなった。勿論、穏やかでやさしい風が「春風」の伝統のコードである。かこの衆よ、やさしい春風のように、難を運んでくださいよ、と。しかし、春

風は実際には突風や強風もあり、そういう風であつてこそ「こかすな」が生きるのではないか・・・という意見もあつた。

歌びとの季節への感受性が、はからずも中国渡りの制度と実感のギャップの間で練られたように、俳句のしなやかさも、われらが身の丈に沿うてくれない季語群の一層の掘り下げによって鍛えられるのではないかと思うのである。整理を急ぐ必要はない。

忘れられない付合

「ホイ、それだ」

篠原 達子

私のACC連句受講はS62年春からだだった。初日「水平思考の出来ない人は連句に向きません」にギクリ、間もなく教室中が才人らしいと気付きショックだった。最後部から目配り気配りの式田和子さんが「あなた一人で入ってきて偉いわねえ」にきよとんとし、一年過ぎた頃、「四宮連句会において」と地図。

先生は連衆の短冊を、つと私の前に並べられ「あなたならどれを選ぶ？」とにこにこ、「エーッ、先生そんなおそろしいこと。」
「ホイ、それだ」

パフォーマンスは芋洗坂
机には見合写真を積み上げて 好敏
先生そんなおそろしいこと 達子

歌仙「勤労感謝の日」 明雅樹
私はぼかんとするばかりだった。

昼顔や有刺鉄線やわらかく 光子
梅雨の晴間を物売の声 達子

二十韻「昼顔や」 明雅樹
「ほう、少し連句わかってきたね。」

肝臓をだましつづつ酌む夜長かな 明雅
芋名月のてびねりの鉢 正江
鳥の声岬のはなを渡るらん 達子

二十韻「夜長」 正江樹
ACCの教室で一斉に出句。この巻は早々私の
が治定でびっくり嬉しかったのを覚えている。

アメリカ連句事情

青柳 飛

アメリカは国土が広いものですから連句の付合いは文音が主流で、最近では電子メールを使うことがほとんどです。歌仙などの伝統形式の他にも自分達で好きなルールを作って巻くなども増えています。厳密には連句とは言い難いですが、カリフォルニアのグリー・グレイが始めたレンゲイなどは今やコンテストも開かれる程に浸透しています。伝統形式についても、教則本などは少ないのに各々が熱心に勉強していて頭が下がります。今年の六月にボストンで開かれたハイク・ノースアメリカという大会で近藤蕉肝、ビル・ヒギンソン両氏が開いた連句ワークショップにも沢山の参加者がありました。

しかし私は、ここ二年ほど連句はやっぱり日本語で日本人と巻くのが良いと思い始めました。理由は色々ありますが、最大の要因は季語と「転じ」です。アメリカにはこれこそ！というバイブル的な歳時記がありません。英語俳句では季語を使うというより季節感のある言葉を使って詠うという気持が強いので、連句の場合には雑の句との差が不明確になったりすることもあります。また小数の人を除き、シラブルを数えて定型にするということはないので長句と短句が単に三行、二行にな

っているだけという場合もあります。絶対君主的な知識を持つ捌きが少ないため、出来上がった作品の質にかなりばらつきがあったり、「転じ」不足が見られることも少なくありません。レンゲイの人氣が高いことから解るようにアメリカ人は一つのテーマの中で糸を張っていくことは得意のように思います。微妙な綾を上手く織り上げた素晴らしい作品がレンゲイにはかなり見られます。残念なことに連句での思い切った発想の転換が難しいようです。

個人意識が強すぎて連句は皆で巻くのだという考えがなかなか理解されないこともあります。勿論、連衆の様々な個性が各々の付けに出てくるからこそ連句は面白いのですが、他人より上手なものを、一つでも多くの付けを、という考えが顕著すぎる場合も決して少なくありません。膝送りにすれば付けの数は平等になりますが、十人ほどが一堂に会してという場合には待つている時間が多く、付けで苦しんでいる以外の時間は無駄話が多いということにもなりがちです。複数の連句を同時に進行させるという手もありますが、日本の連衆と違って全員が式目を理解しているという場合が少ないので、誰かがまとめて役あるいはお目付け役になっていないと季語が抜けてしまったり、付けが近すぎたりという問題も出てきます。それでは、と優勝にすると「何故私の付けは駄目なのか」という質問に

答えるのに余計な時間と労力を費やすことも少なくありません。捌きが一直するということもよほどの場合意外は困難です。

若干悲観的になってしまいましたが、英語での連句が不可能という訳ではありません。米国俳句協会では毎年連句コンテストを開いていますし、連句をやりたい、やってみたいという人は少なくありません。連句の裾野は確実に広がっています。

俳句は北米だけでなく世界各地に根を張っており、旧ユーゴスラビアの俳句の父と言われるクロアチアのウラジミール・デヴィデ氏が、「俳句は日本が世界に与えた最大の贈り物」とおっしゃる程に大変な発展を遂げています。連句にもアメリカ人にびったりあうような式目が段々と芽生えてきているとは思いますが、但し、どうもお世話をするとか指導するとかが苦手な私は日本語の世界へとなびいてしまうようです。

フネ

青柳 飛さんのプロフィールは東京生まれで、1982年渡米、現在サンフランシスコ在住。1995年米国俳句協会入会。英語による短歌、俳句を始める。1997年 Haiku Poets of Northern California (北カリフォルニア俳人会) 短歌コンテスト大賞、1998年米国俳句協会連句コンテスト大賞、2000年米国短歌協会コンテスト奨励賞など受賞。

源心庵「月見の会」 梅田 利子

源心庵恒例の月見の会は、十月一日仲秋の名月に江戸川区行船公園源心庵で、連衆十八名三卓で午後二時より催された。

私はかねてから、簡素で美しい源心庵と汐入り池を見て、ここで月見の連句会を開いたらどんなに素敵かしらと思ひ、会の方達に「歌仙を巻いてナオの月の定座あたりに差し加かった頃、汐入りの池の上に煌々と月が上がって来るといふ趣向はどうかしら」と持ち掛けると、早速に皆さんが賛同して下さり、平成七年九月十日忘れもしない第一回源心庵いざよい連句会が催された。連衆は二卓十四名、几帳面な篠原達子氏の記録を見ると「午後三時より始まる。酒も肴もよし、気がかりだった空は次第に晴れてまことに見事な月上るときに『笛の会』の稽古の部屋あり。さながら篠笛關笛つきの十六夜の月の出となりけり。」と記されている。

以後毎年月見の会は源心庵の会恒例の行事となり、平成十年、十一年には明雅先生のおいでを頂き益々盛会となった。しかし名月は中々の名役者、おいそれとは顔をみせてくれない。七回を数えて月が顔を出してくれたのは一回目と六回目のみ、六回目には遅くなつて漸く月が顔を出し思わず拍手と歓声が上がつた程だった。今回も台風余波の雨が降り止まず最悪の名月となつてしまつたが、座は終

始笑い声もなごやかに源心三巻を巻き上げた。兼好法師は徒然草の中で「月はくまなきのみ見るものは。雨にむかひて月を恋ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれに情ふかし。云々」と記している。

皓皓たる月をのみ愛づるのは、田舎者の愚の骨頂。降る雨にむかつて見えない月を心の眼で見、思いめぐらすことこそ風流なのだそう、その様な句がこの夜の源心三巻の中に入っていたら、又楽しい事である。

この度、「源心」の募集に当って、源心庵の会について少し紹介したいと思う。

A C C教室の十期生である滝川雅代氏が平成四年、当時A C Cの新人だった神谷安子氏の案内で源心庵を訪ねた時、その庵の風雅さに魅了され、万雷俳句会から同期で入会された長崎、須田氏と少し先輩の篠原達子氏の五人の勉強会でスタート。その後続々と先輩後輩が入って来られて、今月で百十三回を数えている。しかし残念な事に源心庵は距離的に都心から遠く、申し込みが大変な事から、今では先生をお迎えする十一月例会と月見の会の二度のみ源心庵で行ない、その他の例会は、青山の東京ウイメンズプラザを使用しているが、交通の便利さと、達子氏の熱心なお誘いのお蔭で常時二十人前後の盛會を得ている。

二十八韻「源心」は 平成六年十一月源心庵五十九回の席に明雅先生においで頂き、その座で始めてご披露され、庵の名を取って「源

心」と命名して頂いた。その後六年余り、コンクール応募の半歌仙や歌仙、短歌行形式に追われてついおろそかになつていた「源心」を何とか皆様に広く活用して頂きたいと思ひ「源心コンクール」を企画、切は十月末なので沢山のご応募お願いいたします。

又月例会は新人の方もどうぞ遠慮なくお出掛け下さる様お待ちして居ります。

月見連句会の発句

- ◎雲払ひ刻々せまる月舞台 英子
- 稍より月の兔よ跳んで出よ 千町
- 漁撈長舳にすくと弦の月 暁巳
- 畦道を先づ整へり収穫期 庸子
- 雨止んで月のあたりのほの明き 富美
- 木犀の香のしつとりと月待てる 如代
- ◎汐入の池のふくらむ良夜かな 淑子
- 木犀の香に迎へられ源心庵 久美子
- 探検の児等の勲章あのかげち 澄子
- 鯉はねる月はいづくへ雨宿り 路子
- 美しき水茎の跡月の席 志世子
- 池の面に浮かべて見たし今宵月 利子
- ◎玉をなす露を飲まばや菊慈童 碧
- 月夜よし我も絵巻の鳥獣 瑞枝
- 盛りあげて芋や団子や月を待つ 達子
- 些かの愛の灯や赤い羽根 安子
- 秋雨や松葉重なる下晴れて かりん
- 初鴨に航跡荒き河口かな 佳之子
- (◎印は各卓の互選で選ばれた捌きの発句)

故和子先生と「卯の花会」近藤 守男

去る八月十三日雑司が谷鬼子母神裏の割烹「大倉」で、式田和子先生のご遺族恭子さんをお迎えして「卯の花会」の集いがありました。当日は故和子先生の新盆にあたり、集まった連衆からそれぞれ次のような供養の発句が出されました。

桔梗提げ拾うタクシー桃井まで 暁巳
黙し坐す剥落仏やみだれ萩 真呂
声あげて鳴く蟬はまだ悲しからず 将義
ワープロに残る草稿こぼれ萩 秀樹
萩風や帯締めて聞く母の声 恭子
美意識のかすかに残る蛍かな 好敏
忘れごとと思ひ出せとや秋団扇 水壺
秋澄むや閻魔相手にご再考 一郎
盆路は土と草なり微笑なり 英二
壺酒の眠りは深しねこじやらし 健悟
鬼子母神齊女かなでる魂迎へ 政志
鬼子母神鉦を鳴らしつ蟬しぐれ 守男
そして、選句の結果、恭子さんの「萩風や」が高点を得られましたのでそれを発句に歌仙「母の声」一巻を首尾いたしました。当日の恭子さんの和装は小物にいたるまで全て形見のお品を召しておられるとのことで、連衆一同の感懐も一入であったと思われまます。

扉を開けて面々が身体を小さくして入室すると、先生はベッドに坐り直られ、満面笑みを湛えて歓迎してくださいました。卯の花会の男ばかりのヒヨコ達、満足な見舞の言葉も述べられず、中には椅子が足りず立つ者もいてもじもじしている、見かねた和子先生、「さあ、連句をやりましょう、立っている人はベッドに坐りなさい」に、一同虚を突かれてぼかんとしているばかり、先生は季寄せを開き、さっさと一句を作って差し出されました。季寄せと筆記用具を常備していた健悟さんが慌ててノートを裂いて短冊を作り、皆に配ったところで面々、狼狽を抑え気持を昂ぶらせつつ、さてお見舞変じて連句教室となつた次第でした。

何しろ「卯の花会」の生みの親でも名付け親でもある先生にとつては、我々は解つたばかりのヒヨコのように思われたのでしよう、術後間もない身を押し潮垂れた我々を指導し鼓舞される姿は、まるで見舞いに来た我々の方が見舞を受けているようで、先生の、現実を受容する潔さと包容力の豊かさにヒヨコ一同深く感動したものでした。

実はこの二ヶ月前の平成元年十二月十八日に「卯の花会」は和子先生の指導の下に発足したのでした。その時のことを健悟さんが、今回の歌仙「母の声」の留書に述べておられるので、引用させていただきます。

「和子先生には、卯の花会は最初からお世話になりました。第一回は平成元年だったと思いますが、北風の強い師走の一日、早稲田のかし部屋の一室で二十韻の手ほどきをうけましたが、外の寒さを忘れるような熱い俳諧の天地に遊ばせて頂いたのを今でもありありと思い出します。」……この時の懐かしい一巻を、先生を偲びつつ敢えてここに掲載させていただきます。

二十韻「暮の市」
見し人も声かけずなり暮れの市 健悟
裸電球揺るる寒風 守男
箱の猫代る代るに抱き上げて 隆一
九文三分の靴きつくなる 和子
金星の蝕のかかりし月仰ぐ 和夫
逢瀬最後と酌みし中汲み 悟
若い娘にグッドバイされ美術展 夫
アブストラクト眼鏡取替へ 男
帆船のかたむきながら入海に 一
天道虫のめざすてっぺん 悟
夏期休暇御岳詣での老父の供 男
ウオークマンの音もしぼりて 同
壁越しに囁く気配誰ならん 悟
逃れた夫についてに掴まる 同
昼月をちらり蒔蕪簾干 男
ぎつくり腰と仲の良き日々 男
トラックは満艦飾にかざられて 夫
お玉杓子の水のこぼるる 一
角帽の記念撮影花万朶 男
おめでとうさん時ぞ清明 夫

